

## レビ記9章「現れる主の栄光」

### 1A 贖罪と献身にある交わり 1-7

#### 1B 指導者への指示 1-4

#### 2B 全会衆の集合 5-7

### 2A 祭司の贖罪 8-14

#### 1B 罪の清め 8-11

#### 2B 全焼のいけにえ 12-14

### 3A 続く民の贖罪 15-22

#### 1B 罪の赦しと献身 15-17

#### 2B 交わりのいけにえ 18-22

### 4A 祭司の祝福 23-24

## 本文

レビ記9章を開いてください。私たちは前回、8章で、祭司の任職式について見ていきました。モーセが、主の幕屋を造ってから、栄光に幕屋が満ちて、そこから主が語りかけた声がありました。いけにえについての教えです。主のことはそこで終えて、8章で、実際に祭司が幕屋における奉仕を始めるにあたって、その任命を行ったのです。

9章は、祭司としての初めの奉仕を見ていきます。そこで起こったことは、再び主の栄光が現れることです。この前、出エジプト記の最後に主の栄光が現れた時は、モーセが一人で幕屋を建て上げた時です。「出40:34-35 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」けれども、今、イスラエルの会衆全体の前で、主がご自分の栄光を火の中で現してください。そして、これは彼らに対する、また祭司アロン自身に対する憐れみです。

### 1A 贖罪と献身にある交わり 1-7

#### 1B 指導者への指示 1-4

<sup>1</sup> 八日目になってモーセはアロンとその子ら、およびイスラエルの長老たちを呼び寄せ、<sup>2</sup> アロンに言った。「あなたは自分のために、罪のきよめのささげ物として子牛、すなわち若い雄牛を、また全焼のささげ物として雄羊を、それも傷のないものを取って、主の前に献げなさい。

「八日目になって」とあります。祭司の任職式は、七日続きました。その間、祭司とその子らは、会見の天幕から決して離れてはなりません。主が、彼らの宥めのために七日を要するからだ、ということです。七は、神の数字であります。完全数です。主は六日で天地を創造し、七日目

に休まれました。その他、聖書全体に神ご自身の完全性を示す数字として出てきます。

そして「八日目」です。これは、「新たな始まり」です。完全な神の宥めの働きがあって、それで新たな始まりがあるということです。キリスト教を公認した後のローマ帝国は、ビザンチン帝国と呼ばれますが、ビザンチン時代の教会堂は八角形をしています。永遠のいのちを示す、ということですが、それは聖書から出てきているもので、主イエス・キリストにある完全な神の贖いがなしとげられて、それで信じる者たちに永遠のいのちが約束されているということです。

その時に、モーセがアロンとその子らと呼び寄せました。それから、「イスラエルの長老たち」も呼び寄せています。それは、これから執り行うことは、イスラエル全会衆の前で行うことですから、その代表者である長老たちも呼び寄せているのです。

そこで執り行うことは、まず、アロン自身の罪のきよめのささげ物を用意することです。そして罪の清めを行った後の献身の表れとして、全焼のいけにえを献げます。ここで、「子牛」を持って来なさいと主は命じています。ここで思い出さなければいけないのは、金の子牛事件です。モーセがシナイ山で、主から律法を受け取っている最中に、麓では、金の子牛をアロンが造り、それから民がその周りで戯れていました。ですから、子牛のささげ物による罪のきよめは、その偶像礼拝と貪りの罪を思い出させるようなものです。言い換えると、主は、アロンが金の子牛を造ったという罪をもきよめてくださって、それで彼が主の前で、またイスラエルの前で仕えることができるようにするためだ、ということです。アロンが自分の罪の清めが果たされたことを知って、イスラエルの民もそれに倣って、自分たちの罪も清めていただくことができます。なんという恵みでしょうか！

<sup>3</sup> あなたはまた、イスラエルの子らにこう告げなければならない。あなたがたは、罪のきよめのささげ物として雄やぎを、また、全焼のささげ物として傷のない一歳の子牛と子羊を取りなさい。<sup>4</sup> また、主の前でいけにえとするために、交わりのいけにえのための雄牛と雄羊を、また油を混ぜた穀物のささげ物を取りなさい。それは、今日、主があなたがたに現れるからである。」

イスラエルの子らは、祭司自身の罪のきよめのためのいけにえと、全焼のささげ物を見て、それに倣っていけにえを献げます。つまり、神の民という共同体は、「罪の赦しと、それに応答する献身」の共同体ということができますね。私たちが、主イエスの御名によって集まる時に、それは、自分の義によれば、決してそこに来ることができないのです。主イエス・キリストの流された血潮があって、血潮が注ぎかけられて、それで集っています。その贖罪があって、そこに神の憐れみがあって、それで主に自分自身を明け渡します。それで、代表である祭司がまず、罪を赦していただき、献身しています。ですから、私たちの課題は自分がいかに正しくあるか？ではなく、いかに神の憐れみを知っているか？であります。自分のどこかに、被害者意識があつたりして、自分は正しいのに、こんな目にあっているというような高ぶりがあれば、どんなに熱心そうに見えても、それは神の前

には忌まわしいものなのです。

そして、イスラエルの子らは、「交わりのいけにえ」を献げます。覚えていますか、イスラエルの長老たちがシナイ山のふもとに集まった時のことを。「出 24:9-11 それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は登って行った。彼らはイスラエルの神を見た。御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった。神はイスラエルの子らのおもだった者たちに、手を下されなかった。彼らは神ご自身を見て、食べたり飲んだりした。」彼らは食べたり飲んだりしていましたが、それは栄光輝く神のそばで、食べていました。これがまさに、交わりのいけにえのコンセプト、考えです。主ご自身が臨むために、主と民が共に食事をする、交わりをすることであります。交わりの中で、主の栄光が見えてくるようになるのです。私たちが、キリストにある交わりがいかに大事かを思わされます。主の名で集まるところに、主がおられて、それで栄光を現してくださいませ。

## 2B 全会衆の集合 5-7

<sup>5</sup>そこで彼らは、モーセが命じたものを会見の天幕の前に連れて来た。全会衆は近づいて来て、主の前に立った。<sup>6</sup>モーセは言った。「これは、あなたがたが行うようにと主が命じられたことである。そのようにすれば、主の栄光があなたがたに現れる。」

主が、再び栄光を現してくださいませ。思い出してください、先ほどのように長老たちが主の御座の輝きがあるところで飲み食いしていたのに、金の子牛を拝む罪を犯したので、彼らからその栄光が離れてしまっていました。しかし、主は憐れみ、恵みを注ごうとしておられます。

偶像礼拝を主が忌み嫌われる理由は、それが神の栄光を見えなくさせるからです。ロマ1章に被造物に現れている神の栄光を述べた後に、使徒パウロはこう言っています。「1:21-23 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」ちょうど、太陽の光を、目の前に十円玉をかざして遮るかのよう、偶像礼拝によって神の栄光が見えなくなるのです。それを取り除く必要があります。私たちの心にある偶像礼拝を取り除く必要があります。

<sup>7</sup>モーセはアロンに言った。「祭壇に近づきなさい。あなたの罪のきよめのささげ物と全焼のささげ物を献げ、あなた自身のため、またこの民のために宥めを行いなさい。また民のささげ物を献げ、主が命じられたとおりに彼らのために宥めを行いなさい。」

先ほども話しましたように、祭司が自分自身の罪を赦していただくことによって、その恵みの器になることで、イスラエルの子らの宥めを行うことができ、それで彼らにも恵みが注がれます。私た

ち自身が恵みが降り注がれることによって、周りの人々に恵みが与えられる手段となります。パウロが、自分が教会の人々を迫害した罪を赦していただいた理由を次のように述べています。「Ⅰテモ 1:16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」

## **2A 祭司の贖罪 8-14**

### **1B 罪の清め 8-11**

<sup>8</sup> そこでアロンは祭壇に近づき、自分のための、罪のきよめのささげ物である子牛を屠った。<sup>9</sup> アロンの子らがその血を彼に差し出すと、アロンは指をその血に浸し、祭壇の四隅の角に塗った。彼はその血を祭壇の土台に注いだ。<sup>10</sup> それから、罪のきよめのささげ物から脂肪と腎臓と肝臓の小葉を、祭壇の上で焼いて煙にした。主がモーセに命じられたとおりである。<sup>11</sup> その肉と皮は宿営の外で火で焼いた。

アロンが、全会衆が近づいて見ているところで、自分のための、罪のきよめのささげ物を献げました。子牛の血は、「祭壇の四隅の角」に塗っています。レビ記 4 章には、祭司が罪を犯した時には、聖所の垂れ幕の前にある香壇の四隅の角に血を塗るように命じられていますが、まだ聖所での奉仕を始めていないので、中に入らずに、青銅の祭壇のところで行っているのでしょうか。それと、イスラエルの子らの中で罪のきよめを見ることができるようにするためかもしれません。

そして、罪のきよめのためのささげ物は、脂肪、腎臓、肝臓の小葉だけを祭壇の上で焼きます。脂肪の豊かさは、すべて主のものであることを示しています。腎臓や肝臓の小葉は、感情の奥深い部分を指していますが、そこにある罪を取り除く意味合いがあります。そして大事なものは、罪をおった部分、肉と皮は宿営の外で、火で焼きますが、イエス様が、エルサレムの都の外で十字架につけられました。

先ほど、神の民の共同体は、「罪の赦しと献身」のそれだと話しました。ヘブル書 5 章で、詳しくそのことを説明しています。「5:1-3 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知で迷っている人々に優しく接することができます。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。」自分自身の弱さも身にまとっています。だからこそ、まずは自分の罪のためのささげ物を献げなければならないのです。主イエスご自身は、罪は犯すことはなかったけれども、肉体を取られて、肉のからだにある弱さは身にまとわれました。そうすることによって、無知で迷っている人々に優しく接することができます。

ある人は、主は私たちの弱さに強い関心を持っておられるということをお話していました。つまり、

主は弱いところにご自分の恵みを注ごうとしているのです。ですから、私たちが集まると、それは弱いように見えて強い。欠陥があるように見えて、完全な神の恵みの働きが見える。つまりいているようで、窮していない。そういった働きなのです。それは神の恵みの栄光が、輝くためなのです。

## 2B 全焼のいけにえ 12-14

<sup>12</sup>アロンは全焼のささげ物を屠り、アロンの子らがその血を彼に渡すと、彼はそれを祭壇の側面に振りかけた。<sup>13</sup> また彼らが、全焼のささげ物を各部に切り分けたものとその頭を彼に渡すと、それらを祭壇の上で焼いて煙にした。<sup>14</sup> それから内臓と足を洗い、全焼のささげ物とともに、これを祭壇の上で焼いて煙にした。

これまでもじっくり見てきましたように、全焼のいけにえは、屠った後の血は祭壇の側面に振りかけます。そして、各部に切り分けたらそれを祭壇の上で焼きます。内臓と足は、洗ってから献げます。こうやって、罪のためのいけにえによる主の憐れみと恵みを知って、それで自分自身を主に献げます。ロマ 12 章にある、自分自身を生きたいけにえとして献げなさいという勧めも、神のあわれみによって願っているということ、パウロは言っています。主が憐れんでくださっていること知って、その愛を知って、それで自分自身も愛するのです。

## 3A 続く民の贖罪 15-22

### 1B 罪の赦しと献身 15-17

<sup>15</sup> 次に、彼は民のささげ物を携えて来て、民のための、罪のきよめのささげ物としてやぎを取り、屠って、先と同様にこれを罪のきよめのささげ物とした。<sup>16</sup> それから、彼は全焼のささげ物を献げた。すなわち、規定のとおりに行なった。<sup>17</sup> 次に、穀物のささげ物を献げ、その一部を手のひらいっぱいに取り、朝の全焼のささげ物とは別に祭壇の上で焼いて煙にした。

自分のためのいけにえを献げた後に、今度は民のためにいけにえを献げます。これで、祭司も民も、主の前で等しいことが明確になりますね。4 章には、民の罪のためのいけにえについて、一般の民の族長が、罪を犯した時に、雄のやぎを屠ることになっています。それと同格のいけにえです。そして全焼のいけにえを献げます。そして全焼のいけにえは、しばしば、穀物のささげ物をその後には献げますが、ここでも同じです。キリストのいのちを示していることを 2 章で話しました。

### 2B 交わりのいけにえ 18-22

<sup>18</sup> それから、民のための交わりのいけにえの牛と雄羊が屠られた。アロンの子らがその血を渡すと、彼はそれを祭壇の側面に振りかけた。<sup>19</sup> その牛と雄羊の脂肪の各部、すなわち、あぶら尾、内臓をおおう脂肪、腎臓、肝臓の小葉、<sup>20</sup> これらの脂肪を彼らが胸肉の上に置くと、彼はその脂肪を祭壇の上で焼いて煙にした。

そして、ついに民のための、交わりのいけにえが屠られました。交わりのいけにえの場合は、血は祭壇の側面に振りかけます。私たちは、キリストにある神との交わりにおいて、キリストの流された血があてがわれているので、交わることができます。そして、主の豊かさを表している脂肪の部類を祭壇の上で焼きます。主こそが、交わりを豊かにすることのできる方です。自分自身が豊かになろうとして交わろうとしても、教会ではそれは交わりにならず、人々との亀裂や分裂が起こりかねません。その人の高ぶりだからです。脂は主のものです。

<sup>21</sup> 胸肉と右のもも肉は、モーセが命じたとおりに、アロンが奉獻物として主の前で揺り動かした。

胸肉と右のもも肉は、イスラエルの民は食べることはありません。祭司たちが受け取り、食べます。民は、その他の肉の部分を食べることになります。その肉は彼らの生活のための食物にもなりますが、同時にそれは礼拝そのものです。パウロは、食べることについて、神の栄光を現すようにしなさいと勧めましたね。「I コリ 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

そして、アロンは自分たちが受け取る前に、それを奉獻物として主の前で揺り動かしています。これは、感謝の祈りを献げていることです。このことも、パウロはテモテへの手紙第一で言及していました。「4:3b-5 しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人々が感謝して受けるように、神が造られたものです。神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません。神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです。」かつては、交わりのいけにえを献げていましたが、今は、神のことばと祈りによって聖なるものとされています。感謝をもって食べるのです。食べることも飲むことも、こうやって私たちは神の前での食事、交わりの食事になります。

#### **4A 祭司の祝福 23-24**

<sup>22</sup> こうして、アロンは民に向かって両手を上げ、彼らを祝福し、罪のきよめのささげ物、全焼のささげ物、交わりのいけにえを献げ終えて壇から降りて来た。<sup>23a</sup> モーセとアロンは会見の天幕に入り、そこから出て来て民を祝福した。

アロンは、ついにいけにえを献げ終えます。その時に祝福しています。両手を上げるのは、何か重要なことを知る時にする仕草です。祈り時もあります。民数記には、アロンの祝福の祈り、祝祷が書かれています。「6:24-26 【主】があなたを祝福し、あなたを守られますように。【主】が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』」

ところで、祝福とは何でしょうか？ 良いとみなすことです。良く言うことです。祝福のことばが聖書

に初めに出てくるのは、創世記 2 章 3 節ですが、天地創造のわざを、神がすべて完成したことに  
ついて、「神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。」とあります。主は、ご自分の造られ  
たものを見て、「見よ。それは非常に良かった。」とされました(創世 1:31)。キリスト者は、祝福され  
た民として定義されています。「エペ 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえら  
れますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくだ  
さいました。」

そして、次にモーセと一緒に、会見の天幕に入っています。幕がかかっている聖所に入りました。  
そこで垂れ幕の香壇のところで、主に祈りを献げたに違いありません。その親しい交わりを持った  
後で再び民を祝福すると、主の栄光が民全体に現れました。かつては、モーセは顔と顔を合せて  
主と語り、それで出てきたら顔が輝いていました。栄光を反射していたのです。その交わりによ  
って与えられた恵みをもって、再び民を祝福しています。

<sup>23b</sup> すると主の栄光が民全体に現れ、<sup>24</sup> 火が主の前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と  
脂肪を焼き尽くした。民はみな、これを見て喜び叫び、ひれ伏した。

いけにえを焼き尽くしたその火は、主が豊かにそのいけにえを喜んで受け入れられたことを意味  
します。しかし火ですから、危うくは自分たちが燃え尽くされてしまうかもしれません。そうした畏敬  
の思いも混じった、大きな喜びです。これが、主の栄光が現れた時の喜びです。

私たちは、ここでイスラエルの民が経験したことをキリストにあって得ることができます。一つは、  
神の栄光を、偶像礼拝などの罪によって見えなくなってしまうことがあります。「ロマ 3:23 す  
べての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず」とあります。しかし、キリストが自分の罪  
の身代わりに死んでくださいました。三日目によみがえられました。そのことを信じることによって、  
私たちは神の恵みによって、その栄光を仰ぎ見ることができるようになりました。「ロマ 5:2 このキ  
リストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神  
の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」

そして、この神に栄光は、御霊による聖めを通して与えられるものです。「Ⅱテサ 2:13b-14 神が、  
御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。  
そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光に  
あずからせてくださいました。」罪のきよめと全焼のいけにえ、そして交わりのいけにえの中に、私  
たちが受けている御霊の聖めが映し出されています。イエス様は、「マタ 5:8 心のきよい者は幸い  
です。その人たちは神を見るからです。」と言われました。